［研究ノート］

# 短期留学のための構成主義教育理論に基づいた異文化コミュニケーションコースの紹介と実践の振り返り

## Designing and Reviewing an Intercultural Communication Course, Based on Constructive Education Theory, to Support Students on a Short-term Study Abroad Program

山 下　美 樹
Miki Yamashita

**Abstract**　*Constructive education theory, which aims to provide a student-centered, active, and reciprocal learning environment, has much to offer to those designing support courses for short-term study-abroad programs that are by nature constrained in a variety of ways. This paper describes and reviews the pre-departure, on-site, and post-program training provided during an intercultural communication course that was offered by the author to a group of nine American students who were participating in a summer Japanese language Study-abroad Program at a university in Japan.*

**キーワード**：構成主義、留学研修（渡航前・滞在中・渡航後）、メタ認知力、異文化間能力、変容教育、Kolbの経験学習モデル
**学際領域**：教育学、異文化コミュニケーション学、海外留学

## はじめに

長期・短期に関わらず海外留学生の継続的な支援として重要なのは、留学先の生活情報や危機管理のみならず、構成主義教育理論に基づいた異文化コミュニケーション教育である。短期留学プログラムに関しては、「留学渡航前研修」、「滞在中研修」、「渡航後研修」を導入することにより、学生の海外留学の目的である異文化間能力の向上を十分に図ることができる。渡航前研修では、学生本人の留学目的と心構え、渡航先の文化（価値観、信念、行動規範等）についての確認。滞在中の研修では異文化コミュニケーション理論を学びながら現地でそれを実践する。そして、自己の異文化体験と変化についての振り返りを個人そしてグループ間で行う。渡航後研修では、留学経験の全体の振り返り、渡航前と渡航後の自己のパラダイムシフト（ものの見方・価値観・行動の変容）についてグループで話し合うことが効果的である。

留学中の貴重な経験について意識的に意味づけをすることで、建設的な「自分の世界観」の構築を可能にする。学習者が教師と共に、異文化経験を「感情」を伴い、「内省」し、「分析」し、「体験」して学ぶことで、短期間の留学でも質の高い学びとなりうる。米国オレゴン州、州立大学のP大学では各年6月下旬から7月中旬の約4週間、日本国内のH大学にて行われる短期サマーセッションプログラムに学部生を送っている。本稿では筆者が本短期留学プログラムに、プログラムディレクター兼、異文化コミュニケーションコースの講師として実施した「渡航前研修」、「現地滞在中研修」、「渡航後研修」の紹介とその振り返りについて解説する。

## 1.「実証主義」対「構成主義」：メタ認知力向上のための構成主義教育理論

本コースは学生のメタ認知力向上を目的としデザインした。メタ認知力とは、自分を客観的に観察し、知ることのできる力である。特に海外留学のような異文化の中で生活をする際は、（1）自分の知識の幅：知っていることと知らないこと、（2）自分のスキルの幅：何ができて、何ができていないか、（3）自分の心・感情の状態：挑戦しようか、逃げようか（fight or flight）、といったメタレベルでの振り返りをすることが重要である。なぜならば、これらを「知る」ことで、周りは気づいているが、自分自身は気づいていないパターン化してしまった自分の心癖や振る舞いを見直し克服することができるからである。海外留学先では異文化に適応するまで、自文化で培ったものの見方、考え方、振る舞いや行動の仕方でコミュニケーションを取るため、誤解、勘違い、一方的な思い込による文化の衝突は避けられない。従ってメタレベルに立ち自分自身を客観的に観察することが大切である。向上させたい点はBennett（1998）が挙げる3つの異文化間能力（*intercultural competence*）である。

（1）マインドセット：知識力（相手の文化に対する認知）
（2）スキルセット：行動力（相手の文化に適したコミュニケーションスキル）
（3）ハートセット：感情力（相手の文化を学ぼうという意欲や態度、モチベーション）

これらの3つのセットを向上させることで、異文化間コミュニケーションを取るうえで、文化相対主義的（Bennett, 1998）アプローチ（自文化、ホスト文化両方に敬意を持ち、異なる文化の価値観・視点から物事を判断でき、文脈、つまり「場」に応じたコミュニケーション）が取れるようになる。メタ認知力の向上は、知識面だけではなく、行動面、感情面からの振り返り無くして望むことはできない。したがって、本コースデザインは「知識」を教師から学習者に一方的に伝達する、従来からの「実証主義的」教授法よりもむしろ、学習者が留学先の現地の人々との交流や「相互作用」、現地の場「文脈」で、学習者の「主観」を通して「知恵」を学ぶ「構成主義的」学びの理論に基づき構成した。実証主義の学びの理論とは、現実は主観的ではなく、人と独立したところに客観的な現実が実存すると考えられており、学習者の頭は何も書かれていない白板のようなものであり、教師の役割とはその学習者の白板に、正しい答えを移行していくことである（Locke, 1690）。 従って知識の

伝達は、権威者である教師から学習者に行われるが（teacher-centered learning）、そこには学習者が自ら考え生み出すような創造性はない（Jonassen, 1991）。「学習者は教師に世界について教えられ、その概念や構造を彼らの考え方の中に複写することを期待される」（Jonassen, 1991, p. 28）。それによって学習者の効果的な学びは強化される（Skinner, 1953）と考えられている。

その反対に、構成主義の教育では実証主義の知識を植え付けるだけのバンキング的な教育（Freire、1972）を批判する立場をとっており、学習者を中心とした学び（student-centered learning）の活動的参加を促し、彼らの知覚を通して現実を構成・意味づけをさせることである（Dabbagh & Bannan-Ritland, 2005）。Vygotsky,（1978）、Piaget（1983）、Dewey（1938）、Freire（1972, 1999）、その他多くの学者が、学習者は社会に参加し他者と協力していくことの重要性を説いている。Vygotskyは、人は社会との相互作用によって知識を構築していくと述べており、Bruner（1978）はVygotsky理論を基盤に、足場づくり（scaffolding）という教師が学習者の支援をすることの重要性について言及している。例えば、子供が言語を学ぶとき年長者から支援を受け、その関わり合いのなかで充実した学びがあると説いている。Piagetもまた、学習者は積極的に周りの環境の中で活動することにより、知識やスキーマ（ある出来事に関してまとまって記憶されている情報、例えば、商店に入り、買い物かごに品物を入れ、レジで支払いをするまでの行動）を構築していくと説いている。Deweyは学びの文脈（場）の重要性を訴え、目的意識を持った学習活動や探究を、教師や他の学習者と行うことの大切さを訴えている。JonesとBrader-Araje（2002）によると、米国の教育現場では1960年代の初めに、実証主義から構成主義の教育に移行し始めたと言われている。

## 2. 短期サマーセッションプログラムと異文化コミュニケーションコースの紹介

2008年夏日本国内のH大学にて開催された、アメリカ人大学生のための短期サマーセッションプログラム（4週間：6月23日～7月18日）に、筆者はプログラムディレクター兼、異文化コミュニケーションコースの講師として従事した。本プログラムにはP大学からの9名の学生（男性6名、女性3名）に加えマサチューセッツ州の大学から12名、アラスカ州の大学6名、計27名が参加した。学生は全員ホームステイをし、平日は日本語・日本社会・文化、華道、水墨画、日本料理などの授業を受ける他、学生交流プログラム、全校あげてのスポーツ際や地元で開かれた国際シンポジウムなどのイベントに参加した。その他、フィールドトリップとして、神社、小学校見学と授業の手伝い、地元の温泉旅行にも参加した。

P大学からの参加学生9名は、上記の内容に加え、筆者の担当する異文化コミュニケーションコースを必修コースとして履修した。本コースの目的は次の通りである（Appendix 1：シラバス参照）。

（1）日米文化の異なる点やコミュニケーションパターンの比較、

（2）文化についての気づきや日本文化に対する感情移入（empathy skill）を実践する、
（3）異文化間能力（知識面、行動面、感情面）を体得する、
（4）曖昧なことに対してより忍耐強くなる。

内省を伴う授業やアクティビティーを行うために、使用言語は学生たちの母国語である英語で行った。

## 3. オリエンテーションと渡航前研修

### 3-1. ミーティング

渡航前研修は留学前の準備として欠くことのできないものである。筆者はオリエンテーションに加え、チームビルディングとこれから起こる出来事を学びの糧とするために異文化コミュニケーション研修を行った。

渡航前研修には学生9名全員が参加した。内容は以下のとおりである（渡航前研修レッスンプラン参照）。

（1）自己紹介と心構え：自己紹介、個々人のプログラム参加の目的、プログラム参加者の一員としてどのような貢献ができるかについての発表と話し合い。自己紹介には、Visuals Speak©というNature, People, Things, Lifeのカテゴリーに分かれた100枚以上の写真から数枚の写真を選び自己紹介の際にビジュアルエイドとして使用した。
（2）オリエンテーション：留学プログラムの詳細と予定、渡航前準備についての説明。
（3）異文化コミュニケーションコース履修についての説明。
（4）渡航前に知っておくべき日本の価値観・習慣・タブーについての確認。自己のアイデンティティの多様性の発見。文化を学ぶためのストラテジー。

本渡航前研修実施後の反省点としては、異文化コミュニケーションの概要説明のための時間を十分取ることができなかったことである。学生が先ず知りたい情報は、「現金は幾ら位所持するべきか」、「現地のインターネット環境」、「滞在中の自分の家族との連絡方法」、「通学手段」、「ホストファミリーへの適切な土産物」など生活情報が中心であった。しかしながら、これから飛び込むホスト文化でのcultural specific情報（挨拶の仕方、友達の作り方、異文化間で起こりうる問題、タブーなど）を得ることはJanet Bennett（1998）の言うカルチャーショックの「予防注射」（inoculation）となる。しかし留意点は、まだ体験したことのない留学先の文化の概念についての講義は退屈してしまうため、渡航前研修の異文化教育は講義形式ではなく参加型にすることである。クイズ形式を取り入れ景品を与えたり、前年度のプログラム参加者をゲストスピーカーを招き体験談を取り混ぜながら進めることで学生の満足度が向上した。

**渡航前研修レッスンプラン**

＊これは筆者の研修当日のメモとして使用し、学生には配布はしていない。

**Orientation and Pre-departure Training on 23rd of May at East Hall room211**

**1. Self-introduction (10 min.)**

• Self-intro by using picture images which represent yourself (use Visuals Speak©)
• What do you want to get the most out of Japanese summer program?
• How can you contribute to this program?

**2. General Information of the Study Abroad Program (30 min.)**

**Orientation**

• Distribute: H University campus map, program schedule.
• Pick up date, time, and location. Students need to inform H University program coordinator their arrival time in advance.
• Check list (Packing, Insurance information, buy a gift for your host family, calling card, etc.)
• The first three day schedule after students arrive in Japan.
• Amount of Japanese yen (cash) they should bring.
• No wireless network on campus, but there is a computer lab with 10-15 computers in the international student center building, which closes at 6pm.
• Library and gym are available to use.

**Guest speakers: students who went to the program in 2006.**

Talk about: Japanese class placement test, Host family, Packing, etc.

**Q&A (15 min.)**

**3. Intercultural Communication Course Orientation: Unwrapping Japanese culture (10 min.)**

**Handouts:** Syllabus with a course schedule; Course Reading Packet; Notebooks for the reflective journal writing.

**Overview of course with syllabus**

• This is an experiential learning program.
• Many reflections on their experience in Japan such as interactions with your host family and other people. For example, regarding Japanese bowing, eye contact, gift giving, restaurant serving, will be done.
• Use Kolb's learning style model in the study curriculum.
• What are objective and subjective cultures?
• Use different perspectives in Japanese culture.

Bennett says, "**Things are not intercultural if you have an American experience in the vicinity of a Japanese event.**"

**4. Pre-departure Training (30 min.)**

• What is culture?
• Cultural Adjustment; Pre-departure tips; Discovering your culture diversity (identities)
• Cultural learning strategies (Give them handouts and they can take them at home.)
• Writing a letter to themselves, which they will open in the post study abroad program (if time allows).
• Iceberg exercise.

**Q&A (15 min.)**

**3-2. 課題**

学生には以上の渡航前研修に加え、（1）留学にあたっての目標設定と、（2）自国にいるときと留学先での自分のアイデンティティと役割がどのように変化するかについて考える課題を出した。この課題は、留学経験の振り返りや自己の人間性の向上、そして人生におけるミッションを考える上で手助けとなるものとして導入した。本課題を作成するにあたり参考とした文献は、Paige et al.,（2006）による、“Maximizing Study Abroad: A Students' Guide to Strategies for Language and Culture Learning and Use”である。設問は次の6つである。

設問1. 自己の海外留学の目標について記述し、自分を表現する8つのアイデンティティを書き出してください。

設問2. 8つのアイデンティティのうち、あなたを語るうえで最も重要なものを2つ選ぶとしたらどれを選びますか。なぜこの2つを選びましたか。

設問3. 8つのアイデンティティを書き込むことは難しい作業でしたか。この作業をすることでどのような洞察を得ましたか。このアイデンティティの中で他人が気づいていないものはありますか。それについてどのように思いますか。よいと思いますか、それとも不満に思いますか。

設問4. 先に描いた8つのアイデンティティに「価値観」を書き加えてください。例えば、「学生である」に付ける価値観は「独立心」、「知識を学ぶ者」かもしれません。

設問5. これらのアイデンティティは海外に出たら、どのように変わると思いますか。

設問6. あなたの役割は、留学先と自国にいる時ではどのように変わると思いますか。

一人の学生の回答例を紹介する。

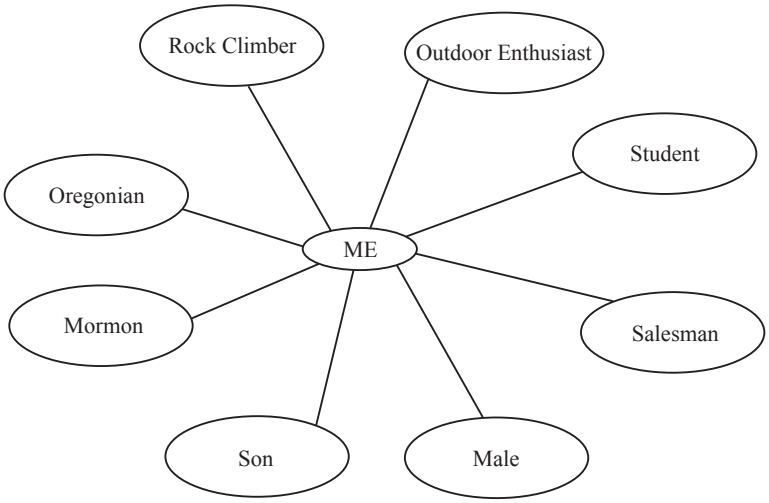
設問1. 自己の海外留学の目標について記述し、自分を表現する8つのアイデンティティを書き出してください。

回答：「私の目標は、ホスト文化を尊重し母国のよい代表となることである。そして、ホスト文化の言葉・文化を学ぶことである。」

アイデンティティとして挙げられた8つは次の通り：私は、「学生」、「営業マン」、「男性」、「息子」、「モルモン教徒」、「オレゴニアン」、「ロッククライマー」、「アウトドア好き」である。

設問2. 8つのアイデンティティのうち、あなたを語るうえで最も重要なものを2つ選ぶとしたらどれを選びますか。なぜこの2つを選びましたか。

回答：「学生である」「モルモン教徒である」を選んだ。現在、学生をしているからである。そして、モルモン教徒は自分の背景や文化を表すものであるからである。家族は何代にもわたりモルモン教徒であり、自分もそうだからである。



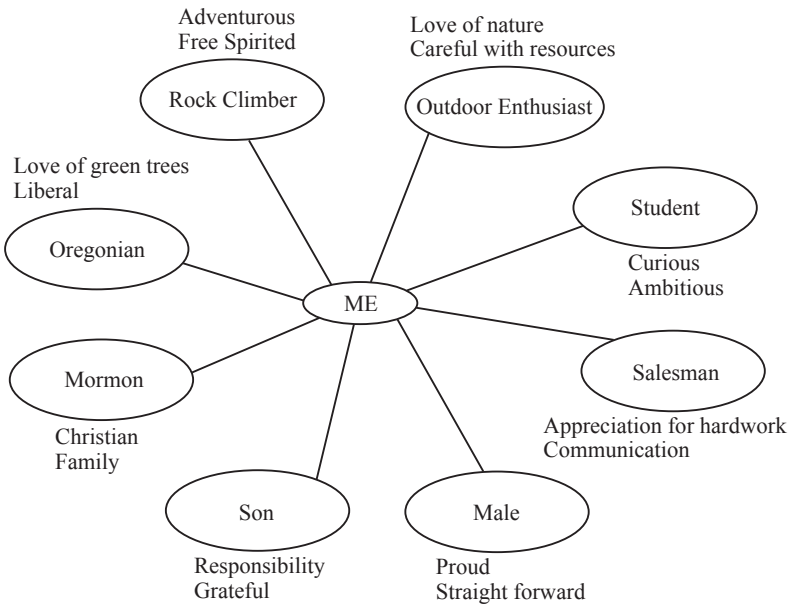

その文化の中で育ったことは今ある自分に大きな影響を与えているからである。

設問3. 8つのアイデンティティを書き込むことは難しい作業でしたか。この作業をすることでどのような洞察を得ましたか。このアイデンティティの中で他人が気づいていないものはありますか。それについてどのように思いますか。よいと思いますか、それとも不満に思いますか。

回答：アイデンティティの記入に関しては、最初は難しかったが慣れてきたら簡単になった。8つで十分に自分のアイデンティティについて説明できると思う。これらがまさしく自分を語っていると感心した。これら8つのアイデンティティは今まで自分がやってきたこと、現在取り組んでいることの集大成だからである。他人は、私が書いたアイデンティティのいくつかについては、私を個人的に知るまで気づかないと思う。例えば、ほとんどの人が私のことを学生だと判断できるが、モルモン教徒であるとか、オレゴン州の人間であることは、彼らが聞いてこない限り知る由がないからである。それらは別に人に知られなくても問題ないことであり、初対面の人に知って欲しいとも思ってはいない。

設問4. 先に描いた8つのアイデンティティに「価値観」を書き加えてください。例えば、「学生である」に付ける価値観は（独立、知識を得る）かもしれません。そして、これらのアイデンティティの価値観の中で対立するものがありますか。

回答：「学生」（好奇心旺盛、野心のある）、「営業マン」（一所懸命な労働とコミュニケーションに感謝）、「男性」（率直さを誇りとする）、「息子」（責任、感謝）、「モルモン教徒」（クリスチャン家族）、「オレゴニアン」（緑の木々を愛する、自由主義、寛大）、「ロッククライマー」（冒険家、自由精神）、「アウトドア好き」（自然を愛する、資源を大切にしている）。価値観の対立については、「モ




ルモン教徒」のアイデンティティとその価値観が、「学生」と「オレゴニアン」のアイデンティティとそれらの価値観と対立すると思った。

設問5. これらのアイデンティティは海外に出たら、どのように変わると思いますか。

回答：「学生」、「オレゴニアン」はより顕著になるだろう。それとは逆に他のアイデンティティは認知されなくなると思う。そのような環境に以前身を置いたことがあるのでそれについては特に問題は感じない。

設問6. あなたの役割は、留学先と自国にいる時ではどのように変わると思いますか。

回答：日本に留学中は、ホストファミリーの「息子」として恥じることのない態度を取ることが大切だが、自分のオレゴニアン、アメリカ人としての役割は自分にとって重要になると思う。なぜなら、それらが特に顕著になるからだ。オレゴニアン、アメリカ人として恥じることのない行動をしたい。とにかく目立つ存在になると思うので良い見本となるようにならなければならないだろう。自分はアメリカでは群衆に埋もれてしまって目立つことはないが、日本ではそうはいかないだろう。自分の趣味であるロッククライマーとしてのアイデンティティや役割はアメリカにいるときよりも重要でなくなると思う。

このようなコメントを残しているが、この学生については、留学プログラム終了の一週間前にはロッククライマーとしてのアイデンティティを満足させる経験がで

きている。留学先の大学内のロッククライミングサークルの一員として数日間活動に参加することができ、留学プログラム終了後は北海道の各地の自然を巡る旅をしたと報告があった。この事前課題を書くことは、自分の中の叶えたい計画を実現するための一助となるであろう。

この課題提出に関しての反省点としては、内省ができる学生とできない学生の開きがあったため、もう少し工夫が必要であったことである。9名中4名がこの課題の設問すべてに答えていたが、5名は部分的にしか答えていなかった。なかなか返事の来ない学生もいたので、それらの学生に対して再度課題のやり直ししはさせなかった。もう一つの反省としては、「文化」が「アイデンティティの変容」に及ぼす影響についての気づきを重点的に学生と話し合うべきであった。この課題をより効果的に使うために、この課題を留学先に再度全員で振り返りを行い、個々人から変化の確認をし、グループ間で比較することが効果的である。

## 4. 滞在中の研修：異文化コミュニケーションコース

P大学の学生たちは、H大学で組んだ4週間留学プログラム（午前中：日本語授業2コマ、午後：日本文化に関する授業2コマから3コマ、イベント、フィールドトリップ）に加え、筆者の担当する異文化コミュニケーションコースを受講した（コーススケジュールと課題読書/Course schedule and Reading assignment参照）。本コースはP大学の授業単位（4単位）の取得は必修であり、週2回×4週間、計7回のクラスを受講した。現地に入ってからは、多忙なスケジュールが始まるため、飛行機の移動時間に事前学習するよう本異文化コミュニケ―ションコースの課題図書は渡航前に配布した。

授業については教室内で約1時間を講義とグループディスカッションで費やし、その後は教室外で数時間の観察を行った。例えば、駅、商店街、デパート、墓地などを訪れ、日本文化の価値観や歴史について観察を行い、人の行動（言語・非言語コミュニケーション）を観察した。また、日本の先住民族であるアイヌ文化について学ぶためにウタリ協会を訪ねたりもした。見学後は必ず観察して気づいたことをグループでシェアし、異文化コミュニケーション理論と結び付けて振り返りを行った。時には、ラーメン博物館でラーメンを食べたり、カラオケを体験したりもした。フィールドでの観察は、出発前に観察ポイント（例えば、墓石は家族単位か、個人単位か；店員同士の非言語コミュニケーション、例として上司と部下を非言語コミュニケーションで見分けることができるか、等；デパートの表示・音楽などはアメリカのそれらと比べてどう違うか、それらには文化の影響があるか、等）を確認した。また、学生たちは日本人の非言語コミュニケーションを観察し、まねをしてみたりもした。例えば、日本人の非言語コミュニケーションについてアイコンタクトが少ないことを実感した学生は、自らも日本人のようアイコンタクトができるよう練習をしていた。加えてアイヌの文化について学んだ学生は自らの振り返り日記にアメリカンインディアンの歴史と比較した感想を書いた。

**コーススケジュールと課題読書/Course schedule and Reading assignment**

| | Topic<br>&<br>Out-of-class activity | Reading Assignment<br>*Please read each reading assignment and prepare for class discussion.* |
|---|---|---|
| 渡航前<br>5/23 | Pre-departure training.<br>Tips for Study Abroad. | None |
| 第１回<br>6/25 | What is culture?<br>Communication style differences between Japanese and the U.S. Americans. | Read (pp. 1-24) in: Bennett, M. J. (1998). Intercultural communication: A current perspective. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concept of intercultural communication: Selected readings* (pp. 1-34). Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc. |
| 第２回<br>6/27 | Cultural value patterns and communication. | Read Chapter 3“What are essential cultural patterns?” (pp. 52-82) in: Ting-Toomey, S., & Chung, L. C. (2005). *Understanding intercultural communication*. Los Angels, CA: Roxbury Publishing Company. |
| 第３回<br>6/30 | Transition shock and Cultural adjustment. | Read Bennett, J. M. (1998). Transition shock: Putting culture shock in perspective. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concept of intercultural communication: Selected readings* (pp. 215-224). Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc. |
| 第４回<br>7/2 | Nonverbal communication: Strategies for making cultural inference and interacting with Japanese. | Read Chapter 8“What are the different ways to communicate nonverbally?”( pp. 198-226) in: Ting-Toomey, S., & Chung, L. C. (2005). *Understanding intercultural communication*. Los Angels, CA: Roxbury Publishing Company. |
| 第５回<br>7/7 | Intercultural communication conflict. | Read Chapter 10“What are the best ways to manage intercultural conflict?”(pp. 258-285) in: Ting-Toomey, S., & Chung, L. C. (2005). *Understanding intercultural communication*. Los Angels, CA: Roxbury Publishing Company. Understanding Intercultural Communication. |
| 第６回<br>7/11 | Becoming interculturally competent. | Read Bennett, M. J. (2004). Becoming interculturally competent. In J. Wurzel (2004). *Toward multiculturalism: A reader in multicultural education* (2nd ed., pp. 62-77). Newton, MA: Intercultural Resource Corporation. |
| 第７回<br>7/16 | Preparing for returning home. | Read Chapter 5“What is culture shock?”(pp.134-135) in: Ting-Toomey, S., & Chung, L. C. (2005). *Understanding intercultural communication*. Los Angels, CA: Roxbury Publishing Company. |
| 渡航後<br>9/12 | Post study abroad training. Debriefing of Study Abroad program | None |

＜第１回目＞「文化とは。日米のコミュニケーションスタイルの違い」

観察目的と場所：日米のコミュニケーションスタイル（高文脈文化･低文脈文化）の比較を目的とし、駅や街中の案内・看板の表記の仕方などを観察した。

＜第2回目＞「文化の価値観とコミュニケーション」

観察目的と場所：日本文化の価値観（年齢・役職の力関係、個人主義・集団主義、等）を観察する目的で、建物はオフィス内のレイアウトや空間の使い方を観察した。

＜第3回目＞「異文化適応」

観察目的と場所：異文化への適応について学ぶため日本独特な雰囲気・臭い・音・視覚・味覚情報を観察・体験し振り返りをした。例えば、魚市場で試食をしたり、寺を訪れ家族単位の日本の墓地を観察した。

＜第4回目＞「非言語コミュニケーション：異文化の中でいかに推測し、日本人と関わるか」

観察目的と場所：アメリカ人から見た日本人の非言語コミュニケーションを観察しその意味を推測する目的で様々な観察を行った。例えば家電量販店内の非言語メッセージ（電化製品の展示方法、壁・床に貼ってある案内表示、天井から吊り下げられている宣伝、店内の大音量の宣伝音楽、店員のユニフォームや役職の違いを示す腕章、頻繁にある「いらっしゃいませ」の掛け声、蛍光灯のライト、店内のレイアウト、店員と顧客の距離、接触するかしないか、アイコンタクトの度合い、支払での釣りの渡し方など。

＜第5回目＞「異文化コミュニケーションコンフリクト」

観察目的と場所：日本の先住民族であるアイヌの文化の価値観や歴史を学ぶ目的でウタリ協会を訪れた。訪問先ではアイヌ研究家の方から歴史や刺繍などの芸術作品、生活の品の展示を見学後、アイヌの物語を拝聴した。

＜第6回目＞「異文化間能力とは」

観察目的と場所：ホスト文化の歴史を学ぶ目的で、開拓資料館にある開拓時代の遺品や遺跡などの展示物を観察した。

＜第7回目＞「帰国前に心がけておくこと、逆カルチャーショック」

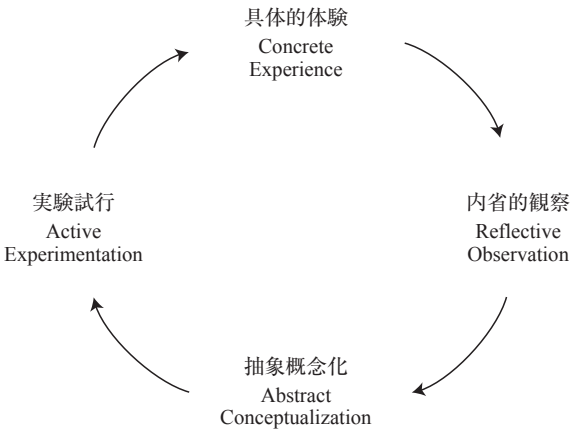
観察目的と場所：集中的な留学プログラムを終え、帰国後起こりうる「リバースカルチャーショック」について話し合い、日本滞在経験全体の振り返りを行った。また、さよならパーティーを兼ねてカラオケを体験した。

#### 4-1. Kolbの経験学習モデルを意識したレッスンプランの作成

本コースは構成主義の学びの理論に基づき、講義のみならずグループディスカッションやフィールド観察、メタ的振り返りなどを実施した。また本レッスンプラン作成にあたり、Kolb（1971）の経験学習モデルを参考とした。この経験学習モデルとは、①具体的経験（feeling：感じて学ぶ）、②内省的観察（watching：観察して学ぶ）、③抽象的概念化（thinking：分析して学ぶ）、④実験的試行（doing：行って

学ぶ）である。新しい経験の解釈・意味づけをする際、Kolb（1971）の4つの学習スタイルを循環しメタ的・客観的な内省・分析をすることで、従来の自己の思考ならびに行動パターンを繰り返すのではなく、その新しい経験を複眼的に意味づけし自己の創造性を高めることが出来る。ここで教師による学びの足場かけの支援（Bruner, 1978; Vygotsky, 1978）やピアーとの共創（Dewey, 1938）が加わることで更に学習者は以前の経験が現在の価値基準を構成していることに気づき、それらを新しい枠組みで構成する変容的学びを得る。

**Kolbの経験学習モデル**




本異文化コミュニケーションコースでは、主にCultural General：日米文化の一般的な比較、例えば、集団主義・個人主義、高文脈文化・低文脈文化など、やCultural Specific：直接生活の中で役立つ情報、例えば、ホスト文化の中での挨拶の仕方、あるべき授業態度、友情について、やってよいこと・やってはいけないことなどを題材として講義やディスカッションを行った。これらの内容に加え、Kolbの経験学習を基に学生の「興味・趣味」を中心とした小プロジェクトを行うことが学生の変容教育に有効であろう。

本提案は一人の学生の次の経験から貴重な学びの成果に基づくものである。3-2.の「渡航前研修の課題」で紹介した設問「留学先では、あなたの役割は自国にいる時とどのように変わると思いますか。」とに対し、その学生は「自分の趣味であるロッククライマーとしてのアイデンティティや役割はアメリカにいるときよりも重要でなくなると思う。」と答えている（p. 106の下線部参照）。しかし彼は留学先の大学でロッククライミング部を訪ね、数日間の短い期間であったが日本人学生に混じり部活動を体験し、留学終了後は日本国内でハイキング旅行をしたという。本人の振り返り日記には、Cultural GeneralとCultural Specificの両方からの側面から、部活での経験が語られておりそこには貴重な成果が見られた。その日記の一部を紹介する。

自らオープンマインドで接し、また、周りの行動に合せることにより皆から

受け入れてもらえた。ロッククライミング部の内集団のメンバーになれた気がした。当初に比べてメンバーとのかかわり方が全く変わった気がする。日本では内集団に入り受け入れてもらうことが非常に大切だと分かった。

この例からも学生の「興味や趣味」、例えば、「ロッククライマー」や「アニメファン」といったアイデンティティに注目し、テーラーメイドの小プロジェクトを行うことは、留学先で彼らのアイデンティティを活性化させ、現地の学生との交流をより効果的にすることができるということが分かった。興味対象が個々人で異なるが、学生主体で進められる仕組みを作り、個々人で必要な参考図書の購読、調査を行うことで個別のプロジェクトを行うことは可能になるであろう。また、振り返り日記やポートフォリオを活用することで、教師と参加学生間でフィードバックができ、共創の成果物として記録を残すこともできる。

### 4-2. 振り返り日記について

現地滞在中は、振り返り日記を毎日最低1ページ記入することを課題とし、記入開始は渡航日前日の6月19日から、留学プログラムの最終日7月18日の2日前、7月16日までとした。記入方法は、単なる日々の出来事を記入するのではなく、異文化体験を通して日本人の振る舞いや行動の裏にある価値観や信念などを自分なりに推測して考えてみたり、必要であれば人に聞いてみる。それらを見た自分自身の感情や反応を客観的に記述してみよう、といったインストラクションを与えた。日記の提出は、異文化コミュニケーション授業で回収した（次ページの振り返り日記のインストラクションを参照）。

反省点としては日記の内容がメタ的振り返りではなく、「1日の出来事の記録」になってしまうことが多かった。学生たちは常に忙しく朝から夕方まで授業や活動が組まれており、日本語授業や他の授業からの宿題もあり帰宅するとホストファミリーとの生活が待っているため、日記を付ける就寝前には疲れ果ててしまい頭が働かないという意見が出た。日記は持ち歩きその都度書き留めるようにアドバイスをしてみたが、難しかったようだ。また、学生の中でもメタ的振り返りが得意な学生とそうでない学生がいた。そこで得意でない学生へのフィードバックに関しては工夫をした。例えば、一人の学生のコメントに「日本人は人目を気にしすぎる」という記述があったが、それに対して筆者からのフィードバックとしては、「それに対してどのように感じたか、なぜそのように感じるのだと思いますか」、「人目を気にすることの文化的な背景・理由は何だと思いますか」といった質問を投げかけた。この様な形で、学生と交換日記のような形で彼らの留学生活をサポートすることができた。また、振り返り日記から学生の心身の状態と行動を把握することができ、問題を未然に防ぐこともできた。

### 4-3. Minute Paper

授業終了時に毎回、数分程度で書ける範囲の小レポート（minute paper）（次々ページ参照）に学生の意見・感想を記入してもらい次回の授業の参考とした。

**振り返り日記のインストラクション**

＊学生はこのインストラクションページを日記の1ページ目に貼り、チェックリストとして使用。

**Intercultural Journal**

Write your Journal from 6/19 until 7/16.
Write minimum one page per day in a journal.
Due at the beginning of each day in class at 11 a.m.
Late journal won't be accepted.

**This journal is based on your internal and external observation.**

**External observation:** describe what you see, why people in Japan behave and act like they do. What are their values, beliefs, and assumptions?（You can guess, or ask them about those if you have a chance.）

**Internal observation:** How you interpret what you saw, how did you feel and react to it, and how did you evaluate it: good, bad, or…?

**In your Intercultural Journal, please touch on following issues:**

□ Observe and describe your daily experience: interaction with your host family and people in Japan in any context, classroom, sightseeing, party, etc.

□ Reflection on your bodies' reaction and feelings how you felt（excited, upset, lost your physical strength, etc.）when you encounter an event or incident.

□ Examination of your feeling like that by reflecting on your perspectives and background. Namely, reflecting on your cultural lenses: values and beliefs, and write them down.

□ At the same time, try to think in the Japanese cultural perspectives, cultural values, beliefs, and assumptions.

**When you observe people in Japan and compare to U.S. Americans, pay attention to:**

□ Nonverbal communication in Japan.

- How much eye contact do people have compare to people in the U.S.?
- How much do people keep personal space when they interact each other?
- How often and which part of the body do people touch each other?

□ Your reactions.

- How do you interpret and judge what happen around you?
- Your emotions: happy, unhappy.
- Your physical sensation: relaxed, tense, or…?

質問内容は以下の通りである：

（1）コース内容と課題読書を振り返り、どの概念が心に響きましたか。なぜですか。

（2）コースアクティビティーや課題読書を通してどのような日本文化の価値、信念を発見しましたか。

（3）講義と課題読書の中で新しく学んだ専門用語または、概念を書いてください。

（4）今日の授業または、課題読書についてのコメントがあれば書いてください。

**小レポート（minute paper）**

**Course Reflections**
**Cross-cultural communication: Unwrapping Japanese culture**

Date: _____
Name: _____
Today's topic: _____

(1) By reflecting course content and class readings, what concepts struck you, and why?
(2) Through the course activities and class readings, what cultural values, beliefs, and assumptions have you discovered about Japanese culture?
(3) New terms or concepts included in lecture contents and class readings:
(4) Any feedback on today's class and/or class readings:

この小レポート（minute paper）の記入をすることで、学生たちの頭の中に授業内容がより定着し、街中へ見学に行く前にその日に学んだ理論を再度確認することができた。また授業進行の改善や学生の理解度を把握する上で役立った。

## 5. 渡航後研修

H大学での約4週間の留学プログラム終了後、9名中3名は日本国内旅行をし、他の学生もそれぞれの予定があったため、全員で集合できたのがプログラム終業後の2か月先となった。集まる数日前にEメールで集合場所・日時の確認をした。渡航後研修には9名中8名が集合した。先ず教室にて渡航後研修をインフォーマルな形式で行い、異文化コミュニケーションコースの最終レポートと振り返り日記を回収した。次に、留学プログラム終了後の2か月間どのように過ごしていたか等について雑談した後、「留学体験の振り返り」、「渡航前と渡航後の自分の内面的変化」について話し合った。全員が「満足のいく体験をすることができた」という意見であった。また、「ホストファミリーとの晩酌が恋しい」、「（帰国後）まるで、耳が聞こえないような状況に陥った……地元では通りを歩いていると路上生活者が小銭をせびったりすることが煩わしい。日本ではそんなことは無かったのに。また日本に戻りたい。」等、のコメントもあった。

その後、場所を日本食レストランに移動し、留学中の体験談に花が咲いた。留学センターのスタッフも加わり、学生たちは改めて自分たちの留学体験を大学関係者と共有した。留学知識と経験が豊富な留学センターのスタッフからフィードバックをもらうことで、学生たちの経験をまた別の角度で振り返ることができた。渡航後研修の反省としては、短期留学経験が及ぼすパラダイムシフトへの影響についてより深く話し合いをもつべきであったことである。留学後のグループインタビュー並びに、個別のロングインタビュー調査を行うべきであった。

## おわりに

短期留学であるからこそ、理論と実践の結びついたプログラムを学生に提供することが重要である。渡航前と渡航後の学生のパラダイムシフトを促すためには、構成主義理論に基づいた学生中心の学びのプログラム構成で、学生が能動的に参加し、メタ認知力を向上させていく仕組みをつくることが大切である。一方的に知識を植えつけようとするのではなく、学生自身が異文化の中で様々な人々と関わり覚醒し人間力を高めることに重点を置いたプログラム構成が必要である。そのためには留学渡航前、渡航中、渡航後にわたり、教員が学生の振り返りのサポートを行うことが重要である。今後は渡航前研修・滞在中研修・渡航後研修のコースデザインに加え、その評価方法についても研究を続けていきたい。

### 参考文献

Bennett, J. M. (1998). Transition shock: Putting culture shock in perspective. In M. J. Bennett (Ed.), *Basic concept of intercultural communication: Selected readings* (pp. 215-224). Yarmouth, ME: Intercultural Press, Inc.

Bennett, J. M. (2008). On becoming a global soul: A path to engagement during study abroad. In V. Savicki (Ed.), *Developing intercultural competence and transformation: Theory, research, and application in international education* (pp. 13-31). Sterling, VA: Stylus Publishing, LLC.

Bruner, J. 1978. 'The role of dialogue in language acquisition' In A. Sinclair, R., J. Jarvelle, and W. J. M. Levelt (eds.) The Child's Concept of Language. New York: Springer-Verlag.

Dabbagh, N., & Bannan-Ritland, B. (2005). *Online learning: Concepts, strategies, and application.* Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall, Inc.

Dewey, J. (1938). *Experience and education.* New York: Collier.

Freire, P. (1972). *Pedagogy of the oppressed.* Harmonds Worth. Penguin.

Freire, P. (1999). *Pedagogy of the oppressed.* New York: Continuum Publishing Co.

Jonassen, D. H. (1991). Evaluating constructivisitic learning. *Educational Technology,* (49) 7. 28-32.

Jones, M. G., & Brader-Araje, L. (2002). The impact of constructivism on education: Language, discourse, and meaning. *American Communication Journal,* 4 (3), Spring 2002.

Kolb, D. A. (1971). Learning and problem solving. In D. A. Kolb, I. Rubin, & J. Mclntyre (Eds.), *Organizational Psychology: An Experiential approach* (pp. 27-42). Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Paige, R. M., Cohen, A. D., Kappler, B., Chi, J.C., & Lassegard, J. P. (2006). Maximizing study abroad: A student's guide to strategies for language and culture learning and use. 2nd edition. Minneapolis, MN: Center for Advanced Research on Language Acquisition, University of Minnesota.

Piaget, J. (1983). Piaget's theory. In P. Mussen (Ed.), *Handbook of child psychology* (4th ed., Vol. 1). New York: Wiley.

Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior.* New York: Free Press

Vygotzky, L. S. (1978). Tool and symbol in child development. In M. Cole, V. John-Steiner, S. Scribner & E. Souberman (Eds.). *Mind in Society: The development of higher psychological processes.* Cambridge, MA: Harvard University Press.

### Author's Profile

Miki Yamashita, Ed.D. is an Associate Professor in the Department of Economics and Business Administration at Reitaku University. Her research interests re in the use of journal writing as a way to assist study abroad students with cultural adjustment as well as creating portfolios as a product that enables them to record what they have learned and allows them to reflect on this. The process here is also intended to enhance their intercultural competence so that they can function more effectively in today's globalized society.

**Appendix 1**

## INTL322U (4 credit)
## Intercultural Communication: Unwrapping Japanese Culture
## Summer 2008 Off-Campus Course at H University, Japan

**Instructor:** Miki Yamashita M.A. **Email:** yamam@yahoo.com **Office Hours:** By Appointment

**Course Description:**
This course provides an introduction to the basic theories and practices of intercultural communication with emphasis on applying those to the Japanese host cultural environment in this study abroad program. Intercultural communication theories include those related to developing intercultural communication competent, understanding intercultural communication conflict, and strategies for learning about culture, which will guide students unwrapping Japanese culture. Students will be expected to reflect on their study abroad experience by integrating those experiences with theories while utilizing journal writing as a reflection tool. This course is designed as part of the study abroad program at H University.

**Course Objectives:** The students will be able to:
1. Compare and contrast Japanese and American cultural differences and communication patterns.
2. Demonstrate cultural awareness and empathy skills toward Japanese cultures.
3. Demonstrate intercultural communication competence (cognitive, affective, behavioral understanding of Japanese cultures).
4. Be more tolerant of ambiguity.

**Required Course Material:**
**Course Reader:** A course packet will be provided at the pre-departure training.
**Journal requirement:** Each student is required to write a journal throughout the course.

**Course Expectations:**
1. Attendance---Attendance is required. If an absence is unavoidable, the student should contact the instructor prior to class. Attendance points will be reduced for absence, late arrival or early departure.
2. Participation---It is expected that each student will participate in discussions and activities so that we all benefit from the ideas and thoughts of one another, and show respect for the thoughts and ideas of others.
3. Reading assignments---It is expected that all participants will have read and thought out assigned material prior to class in order to fully participate in discussions.
4. Late Assignments---It is expected that all assignments will be turned in on time. Students are to speak with the instructor prior to the required due date if it is anticipated that an assignment will be turned in late. Late assignments will have points deducted accordingly.

**Assignments:** ☐ **Check off when you complete your assignments!**

**Pre-departure training on May 23rd:**

After pre-departure training you will:

☐ Write a personal goal statement to make the most of your study abroad experience and Email it to the instructor (yama@yahoo.com) by **June 2nd**.

☐ Do exercises on page 1 and 2 in a packet, "Exercises and Handouts." An exercise on page 1, "Discovering your cultural diversity" and an exercise on page 2, "Reflection questions." Answer to those questions and type them up on a MS Word document and send it to the instructor via email (yamam@yahoo.com) by **June 2nd**.

**In country, Japan**

☐ You will keep a daily Intercultural Journal (minimum one-page. A journal notebook to be about 9 x 7 inch.).
*Write in your journal from 6/19 until 7/16.
*Structure your Journal writing according to guidelines.

☐ Daily Intercultural Journals are **due at the beginning of the next day class at 11 a.m.** Late journals won't be accepted.

☐ You will turn course reflections at **in the end of each class.**

**Post Study Abroad Training on Friday, September 12th.**

☐ Final papers, due on **August 15th**. Turn in a hard copy at the Post Study Abroad training or at the office of International Studies (EH Room 224) or Email it to the instructor. No late assignments are accepted.
As a final integrating activity, you will write a paper about your study abroad experience by telling your stories (minimum 6 pages, maximum 10 pages). Use the following structure:

- ☐ **Introduction:** Created a context for your paper. Identify your objectives by telling the reader what you plan to discuss in the paper and how you plan to do it. (One paragraph).
- ☐ **Thesis statement:** Outline at least four intercultural communication concepts (individualism and collectivism, high-context and low-context, in-group and out-group, uncertainty avoidance, power distance, etc.) to write your stories.
- ☐ **Stories and Analysis:** Tell your stories by addressing specific examples and then referring to the intercultural communication concepts you have learned in this course. Tell readers how your perspectives have changed or have not changed through this study abroad program, and explain what new intercultural communication skills you will put to use? (Possibly divide this section into 3–5 sections).
- ☐ **Conclusion:** Summarize your final reactions and learning from being in Japan.

* Final paper is to be typed, double-spaced, 12 point font, APA style references (see www.psywww.com/resource/apacrib.htm) and free of grammatical errors.

**Grading:** Final Grade is based on points of total points
A 95-100pts., A- 90-94.99, B+ 87-89.99pts., B 84-86.99pts., B- 80-83.99pts., C+ 77-79.99pts., C 74-76.99pts., C- 70-73.99pts., D+ 67-69.99pts., D 64-66.99pts., D- 60-63.99pts., F <59.99

**Grading Points:**

| | |
|---|---|
| **Pre-departure Assignments** | 1 pts (A personal goal statement to make the most of their study abroad experience.)<br>2 pts (“Discovering your cultural diversity” and “Reflection questions” in a packet, “Exercises and Handouts.”) |
| **Attendance** | 16 pts (Pre-departure training 1pt + 7 classes x 2 pts + Post Study Abroad training 1pt) |
| **Participation** | 16 pts (Pre-departure training 1 pt + 7 classes x 2 pts + Post Study Abroad training 1pt) |
| **Course refection** | 7 pts (1pt x 7 intercultural class lectures) |
| **Intercultural Journals** | 28 pts (1pt x 26 days, start keeping journal from 6/19 until 7/16) |
| **Final paper** | 30 pts |
| **Total** | 100 pts |